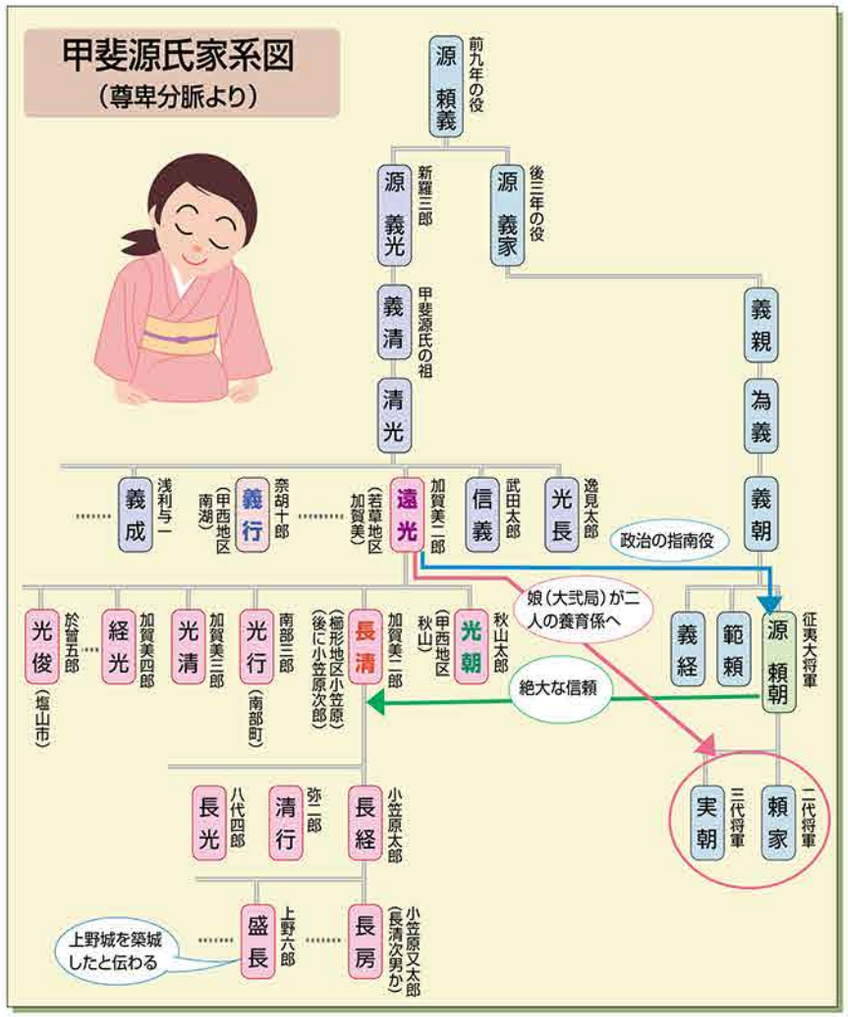
ふるさとの誇り

其の45

甲斐源氏の家伝「小笠原流」①

加賀美遠光



法善寺（加賀美遠光館跡）

南アルプス市の歴史を紐解く中で、古代から中世にかけて活躍した武士団の一族「甲斐源氏」の存在を忘れることはできません。

特に加賀美遠光から始まる一族の活躍ぶりはこれまでにも何度かこのコーナーでも紹介してきました。

武家の名門として活躍を果たす甲斐源氏において、その家風はその後の日本人の生活の中へときづきます。とりわけ小笠原流礼法は加賀美家・小笠原家の家伝が室町期・江戸期の将軍家や武家の故実[※1]として定着し、さらに庶民に浸透し現在の生活文化に根ざしてきたのです。

清和源氏の家伝　糾方的傳

現在に伝わる系図[※2]をもとにご紹介しましょう。加賀美遠光は源清光の二男とも三男ともされていますが、代々清和源氏に受け継ぐ糾方（弓法ともいい、おおまかに弓馬故実のことを指します）を、源義家、義光などを経て祖父源義清より、的傳[※3]を受けたとされます。つまり、数ある兄弟の中でその器量があったために選ばれたといわれています。糾方はさらに子の長清（後の小笠原長清）に的傳したとされます。

加賀美遠光は、平安京にて天皇の宮中警護にあたっていた際に、弓の名手として鳴弦の術で京の怪異を退治したという伝説があります。そのとき褒賞として「不動明王像」と「王」を賜ったとされます。不動明王像は現在も身延町の大聖寺にあり国の重要文化財に指定されています。また「王」の字はデザイン化され現在の加賀美家、小笠原家の家紋である「三階菱」となったと伝わります。

また遠光は平家追討の功績により、武士として初めての国司となった六名に選ばれて信濃守となり、源頼朝の高い信頼を受けていたことが伺えます。

後に鎌倉幕府の三代目将軍となる実朝が誕生した際にはその儀式の行事役を務め、また、将軍家の行事等を定めたり、頼朝の随行者として活躍していたことが「吾妻鏡」などの書物で伺えます。

これらの活躍の伝承を示すように、他の系図には「文武の棟梁」と記されています。この遠光の文武両道ぶりが子の長清へと伝わり、代々育まれていく中で大成してゆくのが「小笠原流礼法」なのです。

次回は引き続き小笠原流礼法の展開過程をご紹介します。

遠光（上）・長清（下）父子坐像
（福井県開善寺蔵）

ふるさと文化伝承館
エントランス展
「小笠原流礼法のこころとかたち」
10月8日（金）～12月15日（水）

※1　昔の儀式・法制・作法などの決まりや習わし。模範とすべき先例。
※2　現在に伝わる系図は何種類かあり、それぞれに多少の違いがあります。
※3　正統を受け継ぐこと。直伝。